

Catriona Kelly

**Russian Literature: A Very Short Introduction.**

Oxford: Oxford UP, 2001, 184 pages; 20 halftones & 2 maps; 4-1/2 x 7

秋 草 俊 一 郎

本書はオックスフォード大学出版局の“A Very Short Introduction”という世界13カ国で翻訳され、邦訳も岩波書店から30冊近くが「一冊でわかる」の副題が付けられて刊行されているシリーズに収められたものだ。『ポスト構造主義』、『数学』、『狂気』など、どれも読みやすく一応（読み終わった瞬間は）分かった気になるのでありがたい。文学関係だとジョナサン・カラー『文学理論』などの必携書もあるが、本書は現在までのところシリーズ唯一の各国語文学の「入門書」であり、英語圏でのロシア文学への関心の高さを感じさせる。

ところで、日本語で書かれたロシア文学の入門書には現在入手可能なものとして『新版ロシア文学案内』（藤沼貴，安岡治子，小野理子著）や最近出版された『はじめて学ぶロシア文学史』（藤沼貴，井桁貞義，水野忠夫著）に加えて、内容が少し専門的にはなるが、定番である『ロシア文学史』（川端香男里編）がある。<sup>1</sup> どれも構成・内容ともによく考え抜かれた、長い間手元において参照できる書物である。しかし、入門書を始めから終わりまで読みとおす機会は意外と少ない。おそらく、その唯一の機会は大学院入試のときぐらいではないだろうか。こうしたこともあり、わざわざ英語の入門書を今さら読もうという気がおきない読者も多いのではないだろうか。

この本の著者であるカトリオーナ・ケリーはオックスフォード大学教授で、ロシア文学、文化史、特にジェンダー史やモダニズムを専門とし、若くして著作を何冊も出版している新進気鋭の研究者である。そして彼女が目指しているのは従来の入門書とは一線を画した新しいタイプの「入門書」だ。「序文」で著者は、ロシア文学の入門書には一般的・伝統的に三つのタイプがあると指摘する。それによれば——1、「正典」の概説。つまりトルストイやチェーホフといった「大家」の人生と作品を中心に解説する。2、文学的な運動や文化的な制度の素描。ロマン主義、リアリズム、シンボリズム、社会主義リアリズムや、検閲といった項目ごとに解説する。3、アカデミズムとは異なる作家たちによる個人的な賛辞で、ナボコフの『ロシア文学講義』のようなもの。これらを日本で出版されている入

<sup>1</sup> この原稿の最終稿を執筆している最中に金田一真澄編『ロシア文学への扉 作品からロシア世界へ』慶應義塾大学出版会が出版された。

門書に当てはめてみると、それぞれ1か2、あるいはその融合という手法で書かれていることがわかるだろう。

しかし、上記のような方法がすでにやりつくされてしまっており、時に枠組みを読者に押し付けるだけであるという理由から、この本をどのカテゴリーにも含めないことを著者は宣言する。ここで著者がとるスタンスは意表をついたものだ。著者はプーシキンの“Exegi Munumentum”を「序文」を引き継ぐ1章の「遺言」に配置することで一編の詩からロシア文学全体の「入門書」をスタートするのである。

この方法が野心的なのは理由がある。著者自身1章で詳しく述べているように、プーシキンはロシアの国民詩人として評価される一方、その価値が外国人にもっとも理解されにくい作家だからだ。著者は2章・3章でプーシキンの記念碑が建築され、その「神話」がいかに建築されていったのかを詳しく論じている。ロシア、ソ連期を通じてこの詩人をめぐって行われた毀誉褒貶自体がひとつの文学史になってしまうことに驚かされる。

また一般に流布しているロシア文学のイメージは長大な心理小説というものだろうが、そこから大きく逸脱しているように見えるプーシキンが国民詩人とはどういうことなのだろうか、という疑問も生じる。4章で作者はいわゆる「私のプーシキン」問題を取りあげているが、それはプーシキンが名を成さなかったジャンルを後世の作家たちが耕したからだという。本書もまたプーシキンという光源を利用することにより、かえってロシア文学の全体的な傾向を照らしだすことに成功していると言えるだろう。

5章以降はプーシキンが直接のテーマというわけではなく、やや離れる。著者が自分の専門分野である女性作家・フェミニズム・ジェンダー史を扱った6章では18世紀～19世紀のサロン文化における女性の役割から出発し、共産主義体制では女性作家が「周辺文学」の烙印のもと正典から外されていたこと、1980年代からの新しいトレンド、1990年代後半に活躍し始めた女性作家たちの紹介まで。ポストコロニアリズムを扱った7章では、ロシアのオリエンタル幻想の源としてのカフカースから出発し、タタールの軛にあえいでいたロシアの東方に対する被支配と支配というアンビヴァレントな関係、作家たちによるフォークロアの活用などが説明される。この二つの章はロシア文学がいかに内なる〈他者〉を血肉としていったのかに焦点が置かれているが、他の西欧諸国で普及しているフェミニズムやポストコロニアリズムとロシアでの認識の差に配慮しており、学ぶところが多い。

8章では宗教が中心的なテーマになり、正教とドストエフスキーのスラブ主義との関係性、「異界」のテーマ、バフチンのカーニバル理論にみる「聖と俗」の混合、聖愚者などといったテーマを概観しつつ、物質と精神の融合がロシア文学の特徴の一つだと述べている。社会主義リアリズムもピョートル大帝以前の宗教的な文学と「人間存在を崇高なものへと押し上げる」という点では共通しているなど、優れた指摘もある。

しかし評者が一番興味ぶかく読んだのは、社会を啓蒙する職業としての作家を論じた5

章だった。その後広くロシアで共有されることになる「作家こそが“master of mind”（これはロシア語の慣用的な言い回し“властитель дум”の英訳か）だ」という伝統を作ったのは、プーシキンだった。1830～40年にかけて読者層が拡大するとともに、作家の倫理観が当然視されて以来、明白な教訓性はロシア作家の特徴となった。ロシアの作家は説教を避けたのではなく、とほうもない叙述の力でそれを語った。結果、人生のすべての面を描こうとする長編こそがロシア文学の代表的なジャンルになったと、なぜ長編小説が特権的な地位を占めるに至ったのかを歴史的に説き明かしている。面白いのは公式には教条的なソ連文学に反目した作家たちでさえ、この“master of mind”の呪縛から逃れられなかったという指摘だ。例えばナボコフの「ポーシュロスチ」に対する嫌悪などがそれにあたり、著者は指摘している。こうした巨視的な見解は「ロシア文学とはなにか」という漠然とした問いそのものへの理解をうながすものと言えるだろう。

これらの9章を作者は英語圏でのロシア文学の受容や英文学との比較も念頭に置きながら近視眼的になり過ぎることなく執筆している。自国文学との比較、影響という視点は日本の入門書ももっと取り入れてもいいだろう。そして特筆すべきはそれぞれの章が独立した読み物として読者の知的な好奇心を充たしてくれる点にある。これは、ともすれば無味乾燥な記述の羅列に陥りがちな入門書や概説書の類にしては出色であると言ってもいい。一方で本書には20枚の図版に加え箸やすめの的なコラム——「ドブジンスキーの舞台デザイン」や「ロシア詩四天王」など——も収められており、読者を飽きさせない工夫がされている。巻末のFurther Readingには各章ごとの必読文献がまとめられており、その分野についてさらに理解を深める参考になる。初心者から専門家まで幅広い読者層を念頭に置いたつくりであり、200ページにも満たないページに詰め込まれた内容は濃厚だ。

以上にざっと内容を述べてきたが、実はこの本は「入門書」としてはかなり高度な議論を含んでいる。本書はロシア文学についての基本的な知識を与えてくれるものではない。むしろそれはある程度前提されており、ドストエフスキーやツルゲーネフなど「大物」の影も薄く、デカブリストの乱など重要な歴史的な事件も省略されている。そのため推奨できるのは実質的にはロシア文学について基礎的な知識を持つ修士以上の院生ということになるだろうか。「余計者」などの我々になじみのあるタームを本質の理解を妨げる「空疎なクリーシェ」として切り捨てる著者の態度はいっそ爽快だが、もちろんやりすぎという見方もあるだろう。*Slavic and East European Journal*の書評欄でライスと著者の間で激しい言葉の応酬が行われることになった<sup>2</sup>のも、本書のこうした性格によるところが大きい。

<sup>2</sup> James L. Rice, “Review: Catrona Kelly, *Russian Literature: A Very Short Introduction*,” *Slavic and East European Journal* 46: 2 (2002), pp.369-370. 及び Catrona Kelly, “Response,” James L. Rice, “Counter-Response,” *Slavic and East European Journal* 47:1 (2003), pp. 104-105.

しかしこうした欠点はこの書評の冒頭に挙げたようなほかの入門書と本書を併用することで解消されると思われる。何事も「一冊でわかる」なんてことはないのだ。むしろ、著者によって現在の研究の最前線からダイレクトに伝えられる熱はそれを補ってあまりあると言えよう。ただ、プーシキン以前の古典についての言及が少ないのはやはり瑕瑾のように思われるので、それを取り扱った章があってもよかった。

序文の最後に著者は「ロシア文学についてのすべてを知ることはできないが、読者がある偉大な文学の一つという以上にそれに触発され、それについて考え、執筆している私の熱狂を分かち合ってくれたら、それにまさる喜びはない」と述べていた。人を感化してしまうもの、それこそが文学の本質なのであり、実は「入門書」にもっとも求められているものなのかもしれない。